

伊豆諸島に今も伝わる
1月の怪異譚

年中行事

伊豆諸島には、新暦または旧暦1月24日前後の数日間、夜間の外出を控えて家で静かに過ごす風習が残っています。島によって風習の呼び名や習慣が少しずつ異なり、大島の場合は「日忌様」、利島、新島、式根島、三宅島の場合は「海難法師」、神津島の場合は「二十五日様」、御蔵島の場合は「忌の日の明神」と呼ばれています。

各島での呼び方

大島	ひ いみさま 日忌様
利島	
新島	
式根島	かんなんほう し 海難法師
三宅島	
神津島	に じゅうご にちさま 二十五日様
御蔵島	き ひ みょうじん 忌の日の明神

言い伝えのあらまし

大島の言い伝えによると、むかし泉津村というところで過酷な年貢の取り立てにきた悪代官の一行を、村の若者たちが1月24日に皆殺しにしてしまいました。若者たちは丸木舟で逃げたものの島々で上陸を拒まれ遭難したため、亡霊となって島にやってくる語り継がれています。ほかにも、若者たちが悪代官を乗せた船の船底の栓を抜いて沈

めたため、亡くなった悪代官の亡霊がやってくるという言い伝えもあります。

物語は諸説ありますが、大島の日忌様と新島などの海難法師は怨霊のように扱われている点は共通しています。御蔵島の忌の日の明神も、赤い衣をまとった鉄下駄の怖い形相の明神様とされ、畏怖の対象といえます。一方、神津島の二十五日様は、島に訪れる神様をご案内する神事のような風習です。

神津島・御蔵島の場合

神津島の二十五日様の場合は、旧暦1月23日から26日の4日間が風習の期間とされます。最初の23日は「三夜待ち」と呼ばれ、それぞれの家庭で宴会を催し、二十五日様の期間に備えます。24日と25日は二十五日様が島に訪れる



神津島の二十五日様では、「いぼじり」とよばれる厄除けを用意します。竹の先に藁を巻き、その先端を燻します。

大島・新島の場合

大島の日忌様の場合は、遭難した若者たちの霊が毎年1月24日の晩に波治加麻神社に帰ってくるといわれ、24日の晩は神棚に25個の餅と海から拾ってきた小石、トベラやノビル(※)をお供えします。また、戸口にも魔除けのためにトベラやノビルを差し、当日の夜は一切外出せず、海を見ず静粛に過ごします。

新島も1月24日の夕方になると、早目に家の雨戸を閉め、入り口近くの隙間や節穴にトベラの小枝を差します。夜更けになると海難法師が通る、もしも出会えば凶事が起きると恐れられ、外に出ることは禁じられ、翌朝まで家中で慎んで一夜を明かします。24日は「親黙り」と呼ぶのに対し、翌日の25日は「子黙り」と呼ばれ、子どもが特に静粛にしなければならぬ日として伝わっています。

※トベラはトベラ科の常緑低木で、枝葉を切ると悪臭がある。ノビルはユリ科の多年草で茎はネギやニラのような匂いがある。

日とされ、仕事は全て休みます。また日中に海や山畑に行くこと崇りがあると信じられています。さらに、夜間の外出も凶事が起こると恐れられており、日没前から各家庭では雨戸を固く閉ざし、明かりを消して静かに就寝しなければなりません。最後の26日は「子黙り」と呼ばれ、子ども達は前日、前々日に引き続き早く就寝しなければならぬ日とされています。

これに対して**御蔵島**の忌の日の明神の場合は明神様が島に上陸するのが1月20日と、ほかの島よりも少し早いです。明神様は上陸すると日ごとに集落に近づき、ついに24日の夜に里に至ると、集落を徘徊するとされています。この日は「忌の日」とされ、各家庭では、夕食に油で揚げた餅を食べます。明神様に出会わぬよう、夜の12時以降は家にこもります。

明神様は25日の早朝に大根ヶ浜から船で神津島へ向かうと信じられており、船を見ると目が潰れるのでこの日は海を見てはいけないとされています。



玄関の左右に長短または短いものを2本ずつ配置。(神津島)



神社の鳥居や本殿などにもいぼじりを飾ります。(神津島)